

# 『無量門微密持經』における 密教的展開について

大塚 伸 夫

はじめに

筆者は、かつて大塚（2005）において、支謙訳『無量門微密持經』の成立問題について検討したことがあった。そのおり、長い初期密教時代を第一期（三世紀前後～五世紀中葉）・第二期（五世紀中葉～六世紀中葉）・第三期（六世紀中葉～七世紀中葉）に分割して、最初期密教の経典を探ってみた。その結果、表題の支謙訳『無量門微密持經』（漢訳年代A.D.222～253）が、最も初期の密教経典であり、インドの地において三世紀前後のころに成立したと論述したのである。本稿はこれに引き続くものであり、『無量門微密持經』の類本に視点をあてて、時代が下った類本の中で、どのように密教的な展開をとげていくのか、その展開過程を明らかにしようとするものである。

そこで、本経にはどのような類本があるのか、ひとつお提示しておきたい。類本は以下に示すように、漢訳には初期密教時代の各三期にわたる九本があり、チベット訳には三本が残されている。また、本経のサンスクリット語写本表裏一葉と、コータン語写本断片の三葉が現在までに報告されている。これらの写本に関する詳細は、Inagaki（1987）や『梵語仏典』を参照されたい。このほか、チベット訳に対応するJñānagarbhaの注釈書が二本あり、最終的に密教的な展開をとげた不空訳の儀軌も存在する。

## 《 漢 訳 》

〈第一期：最初期密教時代（三世紀前後～五世紀中葉）〉

- I No. 1011 支謙訳『仏説無量門微密持經』一卷（訳出年代A.D. 222～253）
- II No. 1012 仏陀跋陀羅訳『仏説出生無量門持經』一卷（“ A.D. 396～418）
- III No. 1013 求那跋陀羅訳『阿難陀目佉尼呵離陀經』一卷（“ A.D. 435～453？）
- IV No. 1014 功德直共玄暢訳『無量門破魔陀羅尼經』一卷（“ A.D. 462）

〈第二期：初期密教展開時代（五世紀中葉～六世紀中葉）〉

V No. 1016 僧伽婆羅訳『舍利弗陀羅尼經』一卷（“A.D. 506?”）

VI No. 1015 仏駄扇多訳『仏説阿難陀目佉尼呵離陀隣尼經』一卷（“A.D. 525～539”）

VII No. 1017 闍那崛多訳『仏説一向出生菩薩經』一卷（“A.D. 585～595”）

〈第三期：初期密教確立時代（六世紀中葉～七世紀中葉）〉

VIII No. 1018 智嚴重翻訳『出生無辺門陀羅尼經』一卷（“A.D. 721”）

IX No. 1009 不空訳『出生無辺門陀羅尼經』一卷（“A.D. 742～771”）

《チベット訳》

X ① 'Phags pa sgo mtha' yas pa sgrub pa zes bya ba'i gzuñs (経部、D. No.140, Na帙 289b4-299a5、P. No.808)

② 'Phags pa sgo mtha' yas pas bsgrub pa zes bya ba'i gzuñs (十万怛特羅部、D. No.525, Na帙 62a6-71a1)

③ 'Phags pa sgo mtha' yas pas sgrub pa zes bya ba'i gzuñs (陀羅尼集部、D. No.914, E帙244b6-254b7、Trans. Prajñāvarma、Ye śes sde、P. No.539)

〈対応サンスクリット語経名〉

• Ārya-anantamukhasādhaka-nāma-dhāraṇī (D. No.140、No.525、No.914、Pek. No.808、聖なる無辺門成就と名づける陀羅尼)

• Ārya-anantamukhanirhāra-nāma-dhāraṇī (Pek. No.539、聖なる無辺門出生と名づける陀羅尼)

《サンスクリット語写本》

XI A. F. Rudolf Hoernle: *Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan*, Oxford, 1916, pp.86-87. [表裏一葉のみで、早期直立グプタ文字によって一面三行で書かれた写本に対するローマ字テキスト。Inagaki (1987, p.3-7) によれば、I 支謙訳では、「復現神足令是天下猗行比丘。悉会精舍稽首畢一面住。(大正vol.19, 680b10-11)」に対応する。後述する章立てでは、「§3 集会-(1)比丘の集会」の後半部分に相当する。]

《コータン語写本》

XII E. Leumann: *Buddhistische Literatur, Nordarisch und Deutsch*, Teil 1, Nebenstücke, Leipzig, 1920, pp.151-155. (コータン語写本の断片三葉に対するローマ字テキスト。Inagaki (1987, p.9-17) によれば、よく対応するとされるVIII智嚴訳では、「如人至寶洲隨意採衆寶～舍利弗彼時不思議功德最勝王子比丘者。今

無量壽佛是也。(大正vol.19, 705b8-706c28)」に対応する旨が明かされている。後述する章立てでいえば、§12の最後部分より、§15にかけての内容に対応する。)

### 《 註 釈 書 》

- XIII 『釈偈』: 'Phags pa sgo mtha' yas pa sgrub pa'i gzuñs rnam par bśad pa'i tshig le'ur byas pa [丹珠爾・怛特羅部D.No.2695, Nu帙3a5-10a6, X②本に対するJñānagarbha (A.D.700~760のころ)の釈偈]

[Ārya-Anantamukhanirhāradhāraṇi-vyākhyānakārikā (聖なる無辺門出生陀羅尼釈偈)]

- XIV 『広註』: 'Phags pa sgo mtha' yas pa sgrub pa'i gzuñs kyi rgya cher 'grel pa (丹珠爾・怛特羅部D.No.2696, Nu帙10a6-63b4, X②本に対するJñānagarbhaの広註)

[Ārya-Anantamukhanirhāradhāraṇi-ṭikā (聖なる無辺門出生陀羅尼広註)]

〈校訂テキスト〉: Inagaki (1987)

〈和訳〉: 堀内 (1966①~⑥)

### 《 儀 軌 》

- XV No. 1010 不空訳『仏説出生無辺門陀羅尼儀軌』一卷

本経に関係する典籍は、上掲したように十四種もの数にのぼる。このうち漢訳九本を見ると、I支謙訳に始まり、IX不空訳が訳出されるまでには、三世紀より八世紀にいたる長い時代の推移がある。それは、インドの地において、本経がほぼ六世紀にもわたって広く流布し、重視されていたことを物語っている。

## 1 『無量門微密持経』の構成内容

それでは、類本における密教的展開を探る前に、初訳であるI支謙訳『無量門微密持経』の内容を概観しておきたい。

本経の構成は、Xチベット訳本を註釈したJñānagarbhaのXIV『広註』によれば、十九章によって構成される<sup>(1)</sup>。とはいえ、初訳のI支謙訳と、最終的な増広の形を示す『広註』の章立てとは、当然ながら対応しない部分がある。その部分については〔 〕にて特記し、後代に訳出された類本が、その後どのように展開しているかを示した。また、『広註』の十九章の科文のみでは意が尽くされない部分もあ

るので、その点は便宜上、細目をたてて、構成内容が理解しやすいように試みた。

〈I本『無量門微密持経』の構成内容〉

§ 1 発起

仏陀が維耶離國 (Vaiśālī) における大樹の精舎に住しておられたと説かれる。

〔II訳以降では、比丘・菩薩の集会者に関する記述が現われる。〕

〔§ 2 因縁 (欠)〕

〔II訳以降、仏陀が三ヶ月後に般涅槃すると説かれる。それゆえ、II訳以降の類本では、以下の内容は釈尊の遺教という体裁をとることになる。〕

§ 3 集会

(1) 比丘の集会

釈尊が目連に対して、三千大千世界の比丘のうち、弟子の行をする者と菩薩の行をする者たち〔II訳以降、声聞・縁覚・菩薩の三乗の者を区別する〕に伝えて、釈尊のもとに集会するよう命ずる。目連は須弥山頂にいたって、その旨を告げる。すると、四十万〔II訳以降、比丘数が増広される〕の比丘が精舎に集会する。

(2) 菩薩の集会

釈尊が慧見 (IX訳：不空見)・敬首 (IX訳：文殊師利童真)・除憂 (IX訳：斷憂暗)・虞界 (IX訳：滅一切境界慧)・去蓋 (IX訳：除一切蓋障)・闍音 (IX訳：觀自在)・殆棄 (IX訳：滅惡趣)・衆首 (IX訳：香象)・辯音 (IX訳：弁積)・慈氏の十菩薩〔IX訳：二十三菩薩、X訳：二十五菩薩に増広〕に対して、十方における無数の仏国土に住する一生補処・無所従生法忍 (無生法忍)・不退転・信解の菩薩に伝えて、釈尊のもとに集会するよう命ずる。かれら十菩薩はそうすると、八百億の一生補処の菩薩・三百億の無所従生法忍菩薩・百億の不退転菩薩・六百億の信解菩薩が集会する。

§ 4 菩薩として具えるべき功德

舎利弗が集会した大衆〔II訳以降、菩薩の大衆〕を見て、心の中で自問する。

(1) 如来の妙行は、その要を諸菩薩にどのように現すのか〔II訳以降、諸菩薩の疑念をどのように除くのかという問いに変化〕。

(2) 菩薩はどのようにして無礙弁才を得るのか。

(3) 菩薩はどのようにして十方における無数の仏国土の諸仏による説法を念じて忘れず、無上正真之道にいたって最正覚をなすのか。

(4) 菩薩はどのようにしてはやく菩薩の四清浄を得るのか。その四清浄とは

①人浄〔II訳：衆生浄〕

- ②法淨
- ③慧淨〔II訳：弁才淨〕
- ④仏国嚴淨〔II訳：仏土淨〕、であるとする。
- (5)菩薩はどのようにして四願悦を得るのか。その四願悦とは
- ①身和悦
- ②言和悦〔II訳：口和悦〕
- ③意和悦
- ④滅和悦〔II訳：方便和悦〕であるとする。
- (6)菩薩はどのようにして四持門に入るのか。その四持門とは
- ①如文行入持門〔II訳：出生無量門持〕
- ②内深忍入持門〔II訳：甚深法忍持〕
- ③解人根徳入持門〔II訳：善於衆生諸根持〕
- ④知行報善入持門〔II訳：善於衆生因果持〕、であるとする。

舎利弗はこのように思念していた。

〔§ 5 知ることを求めること (VII・IX・X訳のみあって、それ以外は欠)〕

〔舎利弗がいかにかに記憶し、いかにかに作意し、いかにかに理解するのかと仏陀に尋ねる。〕

§ 6 請問 (III訳・VI訳は欠)

これらは菩薩の清淨なる無量の慧地であるため、舎利弗は釈尊に説いてくれるよう懇請する。

§ 7 認許 (III / IV / V / VI訳は欠)

釈尊は舎利弗を善いかなと讃嘆する。

〔§ 8 対向 (I~VI訳は欠)〕

〔その時、舎利弗は世尊の言葉を聞き、世尊に説くよう願う。〕

§ 9 持要句 (=陀羅尼句、I / II / III訳までが陀羅尼句の漢訳、IV訳以降が漢字音写で、徐々に増広)

釈尊は、諸菩薩がはやく持行を成就させようと思い、この「持要句」を行ずるならば、はやく「無量之門」に入って「微密持」を得ると説いて、次の40句からなる持要句を教示する。

<sup>1</sup>謂是 (tadyathā) <sup>2</sup>無爲 (akhe) <sup>3</sup>無向 (mukhe) <sup>4</sup>如正意解 (samantamukhe)。<sup>5</sup>爲應 (siddhe) <sup>6</sup>爲滅 (niruddhe) <sup>7</sup>内明 (prabhe) <sup>8</sup>順道 (hile) <sup>9</sup>爲履上迹如微妙行 (carācaraṇe) <sup>10</sup>不動 (acale) <sup>11</sup>寂靜 (araṇe)。<sup>12</sup>無量 (意) (nirmate) <sup>13</sup>無上 (生) (nirjāte) <sup>14</sup>微密 (nirhāre) <sup>15</sup>無垢 (vi-

male)。<sup>16</sup>清淨 (śuddhane) <sup>17</sup>自然 (prakṛtivarṇe) <sup>18</sup>惟無惟 (bhavavibhavanane) <sup>19</sup>無所著 (asaṃge) <sup>20</sup>明光 (vipulaprabhe) <sup>21</sup>悦懌 (saṃkaṣṣaṇe) <sup>22</sup>果而 (dhidhire) <sup>23</sup>大勇 (mahādhidhire) <sup>24</sup>爲美譽 (yaśovate)。<sup>25</sup>動 (cale) <sup>26</sup>無動 (acale) <sup>27</sup>以正動 (samacale) <sup>28</sup>近道因 (dṛḍhasandhi) <sup>29</sup>能善 (susthire) <sup>30</sup>與 (譽) 遊 (asaṃgavihāre) <sup>31</sup>無罣礙 (asaṃganirhāre) <sup>32</sup>入諸法門 (nirhārayukte)。<sup>33</sup>強而 (sthire) <sup>34</sup>有勢 (sthānavati) <sup>35</sup>光大 (mahāprabhe) <sup>36</sup>照遠 (vipulaprabhe) <sup>37</sup>解等意 (samantamukhe) <sup>38</sup>無不入 (sarvatānugate) <sup>39</sup>不斷 (anācchedye) <sup>40</sup>持實 (dhāraṇidhāne)。

### § 10 陀羅尼の自性

釈尊は、舍利弗に対して、この「持」を行ずる菩薩は、無数法を行じて知ることなく、諸法の断を覚り、不作・不見で、合せる（相応）法から離れ、生と滅を見ず、過去・現在・未来を知らず、已成未成の仏を随念する行でもあると説く。その場合、仏陀の相・種好・種性を念じず、群〔II訳：眷属〕や方土でなく、勞を尽くすことでなく、知ることなく、人が浄らかでないとか、法を説かないとかを知ることなく、我のためでなく、彼のためでなく、法や律ではなく、行ずることなく、除くことなく、身体を念ずることなく、人を念ずることでもない、として「持」の自性の境界を説く。

### § 11 持（陀羅尼）の五種功德

釈尊は先の「持」の自性を讃嘆する。持とは

- (1)一切法において、「無受」を行ずることで、それこそが「念仏」をなすと名づけられる〔II訳：一切諸法を執受して念仏に随順〕。
- (2)一切法の正帰であり、これこそ「無畏持義の蔵」である〔II訳：一切諸法所入の無畏持門微妙なる句義〕。
- (3)願を満たし、上道を備え、諸の定を調静するすべての徳本である〔II訳：一道に随順する三昧〕。
- (4)彼によらず、自ら法より生ずるもので、種姓や相好を自然に行ずるものである。
- (5)邪行がなく、断行がない〔II訳：正覚をなし、諸の魔事を度す〕、と説く。

### § 12 持（陀羅尼）の得益

釈尊が「持」の自性を説くに、菩薩が無量門微密の持を学ば〔II訳：この持を聞く者あれば〕、無上正眞の道〔II訳：阿耨多羅三藐三菩提〕において不退転になると説く。その理由は、衆生の行より無量得行の持にいたるから〔II訳：一切衆

生の所行処をよく分別して無所得を得るから]と説く。そして、まとめの二十一偈を説く。

### § 13 三種の四法行

(1) 釈尊が舍利弗に対して、菩薩には四法行があり、これによって早くこの「持」を得ると説く。その四法行とは、

- ① 愛欲を嫌悪すること
- ② 衆生を害さないこと
- ③ すべての所有物を布施すること
- ④ 昼夜に法を楽うこと、であると説く。

(2) また、四法行があつて、早くこの「持」を得ると説く。その四法行とは、

- ① 山沢の居内において修習すること
- ② 深法忍を行ずること
- ③ 利養を慕わないこと
- ④ 無量の施を行じて身命を惜しまないこと、であると説く。

(3) また、四法行があつて、早くこの「持」を得ると説く。その四法行とは、

- ① 八字義に入ることであり、その八字とは、
  1. 迹 [II訳：波=pa]
  2. 敏 [II訳：羅=la]
  3. 惟 [II訳：婆=ba]
  4. 棄 [II訳：闍=ja]
  5. 悲 [II訳：迦=ka]
  6. 調 [II訳：陀=dha]
  7. 滅 [II訳：除=śa]
  8. 忍 [II訳：叉=kṣa] であると、常にこの「持」を書くこと
- ② 誦説し、意を調えること
- ③ 内性をこの法要に合すること
- ④ 衆生に大道を勧め行じさせることで、菩薩がはやくこの「持」を得ると説く。

こののち、釈尊はまとめの十偈を説く。

### § 14 四法行による四徳

釈尊が舍利弗に対して、菩薩がこの「持」をなすと、四徳が生ずると説く。その四徳とは、

- ①常に諸仏を念ずること
- ②邪行がないこと
- ③はやく行の障害を除くこと
- ④無量門微密の持に入ること、と説く。

#### § 15 燃灯仏と無量寿仏の因縁譚

釈尊が燃灯仏と無量寿仏の因縁譚を以下のストーリーで説く。

- (1)無数劫の過去に「宝首曜王如来」が世に出現した。
- (2)その「宝首曜王如来」が無量の人々を度して涅槃する時に、「光乗転輪王」がいて、その太子が「無念徳首」といった。
- (3)無念徳首太子は千八百年の間、如来よりこの「持」を聞いて行じた。七千年のあいだ眠ることなく、また七千年のあいだ身に対する愛着を起さず、七千年のあいだ財利のことを思わず、七千年のあいだ一心に行じて、九十億の仏陀を見て説法を受持した。太子は沙門として出家して九万年の間、この無量門微密の持を大衆に解説し、無上正眞の道を行じさせ、出家させ、不退転の地に進ませた。
- (4)その大衆の中に、尊者の子である「月行」という者がいた。月行は同沙門の説く法要を聞き、その功德によって七十億の仏陀に会い、「持」を得て、菩薩の無量の弁才を体得し、その後三劫のあいだ諸仏を見た。そして、月行は三劫の末時に、「錠光(燃灯) 仏」となった。
- (5)かの法を講説した「無念徳首太子(沙門)」は、今は西方「無量寿仏」となっている。
- (6)賢劫の諸菩薩〔II訳以降：釈尊と賢劫の諸菩薩〕もこの法を聞き、みな四十万劫の生死の行(罪障)を除くことができた、と説く。

#### § 16 法門の利益

- (1)釈尊は、「持」を学ぶ者がはやく作仏しようと思ひ、この経を得て道行を願うならば、不退転地に立ち、必ず無上正眞の道をなすであろうし、ましてや「持」を書き、誦行するならば、一切の人々はその福德を量ることができないと説く。そして、釈尊はまとめの七偈を説く。
- (2)釈尊は、この「持」を行ずる菩薩に対しては、雪山中にいる八大神(夜叉神)がともに見て守護すると説く。その八大神とは、1. 勇決神(Sūra)、2. 果強神(Dr̥ḍha)、3. 饒裕神(Prabhu)、4. 雄猛神(Nārāyaṇabala)、5. 體行神(Cāritramati)、6. 清潔神(Karāla)、7. 難勝神(Durdharṣa)、

8. 多安神 (Subāhu) であるとし、それらの八大神が必ず来ると説く。  
そして、以下のような持行次第を説く。

- ①常に澡浴する。
- ②浄衣を着る。
- ③経行する。
- ④衆生を慈念する。
- ⑤この法要を思惟する。

その結果、八大神が現前して、必ず誦行が安定すると説く。

(3) 釈尊は、欲行天にいる八菩薩も常に存念すると説く。その八菩薩とは、

1. 無愛天 (Roca)、2. 悦可天 (Vairocana)、3. 智光天 (Prajñā-prabha)、4. 懷金天 (Sūryaprabha)、5. 積習天 (Saṃcodaka)、6. 願滿天 (Sarvābhiprāyaparipūrṇa)、7. 星王天 (Nakṣatrarāja)、8. 行審天 (Cāritramati) であるとする。この「持」を行ずる者が、持を思惟し常に恭敬すれば、微妙なる法忍を行ずるごとしであるとし、軽く試してはならないと諫める。

(4) 釈尊がこの法を説いた時、ガンジス河の砂ほどの菩薩がみなこの「持」を得て、不退転となり、無数の諸天と未発道意者が無上正眞の道に発起したと説く〔VI訳欠〕。

#### § 17 法門の名を質ねること〔VI訳欠〕

舍利弗が釈尊に対して、この経をどのように名づけるのかと尋ねる。

#### § 18 命名〔VI訳欠〕

釈尊がこの法の要を説いて、

- ①「無量門微密の持」と名づけ、
- ②一名、「成道降魔」と名づけ、
- ③「得一切智」と名づけた。

そして、まさにこれを奉持すべきであると説く。

#### § 19 随喜

釈尊がこれを説き終わると、みなが歓喜した。

以上が『無量門微密持経』の構成内容である。さらに要略すると、

- 経典の最初に、菩薩のもつべき能力や功德が示される。
- 中間に、菩薩の能力や功德を実現するための「持要句」と、目指すべき境界の「無量門微密持」が提示される。

- ・最後に、実践上の用心と具体的な行次第が明かされる。

という三段で構成されていたといえる。その中でも、終始一貫する本経のテーマは、支謙訳の特徴でもある「持」という語によって示される「陀羅尼 (dhāraṇi)」であろう。本経において「持 (陀羅尼)」という場合、二種の意味が含意されていた。

- ・第一は、§ 9 の念持する「持要句 (陀羅尼句)」そのものを指す場合である。
- ・第二は、すでに堀内 (1965、pp.303-307) や氏家 (1979、pp.12-13) が指摘したように、口に唱える陀羅尼句そのものではなく、大乘の菩薩が得道を旨とし、「持要句」や八字の字義に導かれて体得する無所得空三昧の境地、いわゆる「無量門微密持」を指す場合である。

このように、本経の意味する「持」の概念には二種類あったといえるが、持要句や八字義は、あくまでも無所得空なる無量門微密持にいたるための導入手段であったといえる。したがって、本経を編纂したグループは、燃灯仏も無量寿仏も実修して作仏したとする微密持を菩薩に獲得させるため、その手段となる持要句・八字義を示すことに力を注いだといえる。そして、この持行を菩薩に実修させるために、初期大乘経典に擯出する菩薩にとって具えるべき無礙智・無生法忍・不退転などの功德を列挙し、なおかつ具体的な行法を提示するといった、そのような構成をとっていたといえる。

このように陀羅尼をテーマとするものは、多くの大乘経典にも見られるので、この点からすれば、本経も同じ陀羅尼経典の中に位置づけることができる。たとえば、本経のいたるところで、「持」によって得られる功德として、諸仏による説法の受持や不忘、そして無分別や無所得を意味する「無受」、あるいは念仏・無生法忍・不退転・最勝覚などといった要語が擯出している。これらの要語からしても、本経が成立する以前の大乘経典（とくに小品系般若経）の影響を十分に受けて、陀羅尼経典として成立したことがうかがわれる。

しかし、そうはいても、本経の後半「§ 13 三種四法行」-(3)八字義観では、『大日経』にも通ずる八字義に関する具体的な観法や行次第が示される。さらに、§ 16(2)~(3)では、八夜叉と八菩薩の現前守護を得るための行法が示される。それゆえ、この二つの行法に限っていえば、従来の陀羅尼経典には見られない異質な内容を含んでいるといえる。とくに、後者の八夜叉と八菩薩の行法次第は、彼らの現前守護を得るためのものであるから、一種の祈願法のような体裁をとっている。このような事作法は、現時点では先行する大乘経典に確認することができないので、本経独自の特徴といえる。しかし、この特徴は本経になって突然現れたものではな

いと思われる。というのも、おそらく本経よりも先行するであろう、小品系般若経のうち最も成立が早いと目される『道行般若経』には、般若を實踐する修行者を天竜以下の八部衆や夜叉などが守護すると説かれている<sup>(2)</sup>。また、『般舟三昧経』においても、『道行般若経』と同様に、この般舟三昧は仏陀の威神力所成のもので、四天王より鬼神にいたるまで般舟三昧の実修者を擁護するなど説かれる<sup>(3)</sup>。さらには小乗経典にも、『大会経 (Mahāsamaya-suttanta)』<sup>(4)</sup> や『阿吒曇胝経 (Ātānāṭiya-suttanta)』<sup>(5)</sup> のように、夜叉による守護をテーマにする経典も存在する。それゆえ、この二種の行法が本経に現れた背景には、上記のような夜叉による守護を期待する風潮が仏教教団の中にすでに存在したからと考えられる。その信仰の上に立脚して、この二種の行法が密教的色彩をおびて創作されていったものと考えられる。唯一、この二種の行法こそが、本経を密教経典視する根拠になるといえる。

## 2 『無量門微密持経』類本に見られる陀羅尼の密教的展開

これより、各類本の中から、とくに密教化が見て取れる点を取り上げて、その展開過程を明らかにしてみたい。まず、密教化の特徴が見られるのは、本経の中心的な役割をはたす「§9 持要句 (陀羅尼句)」においてである。以下より、この持要句について、初期密教時代の各三期にわたって見ていくことにしたい。その場合、持要句なる陀羅尼句は長文であるため、全類本を列挙するには紙数の関係上無理がある。それゆえ、第一期にはI訳・IV訳を取り上げ、第二期にはVII訳を、第三期にはVIII訳を取り上げて、段階的にみることにしたい。(なお、陀羅尼句の左上にふした番号は、I支謙訳による原陀羅尼句番号である。)

### 《§9 持要句 (陀羅尼句)》

#### 〈第一期〉

- I <sup>1</sup>謂是 (tadyathā) <sup>2</sup>無爲 (akhe) <sup>3</sup>無向 (mukhe) <sup>4</sup>如正意解 (samantamukhe)。<sup>5</sup>爲應 (siddhe) <sup>6</sup>爲滅 (niruddhe) <sup>7</sup>内明 (prabhe) <sup>8</sup>順道 (hile) <sup>9</sup>爲履上迹如微妙行 (carācarāṇe) <sup>10</sup>不動 (acale) <sup>11</sup>寂靜 (araṇe) <sup>12</sup>無量 (意) (nirmate) <sup>13</sup>無上 (生) (nirjāte) <sup>14</sup>微密 (nirhāre) <sup>15</sup>無垢 (vimala)。<sup>16</sup>清淨 (śuddhane) <sup>17</sup>自然 (prakṛtivarṇe) <sup>18</sup>惟無惟 (bhavavibhavane) <sup>19</sup>無所著 (asaṅge) <sup>20</sup>明光 (vipulaprabhe) <sup>21</sup>悅懌 (saṃkarṣaṇe)。<sup>22</sup>果而 (dhidhire) <sup>23</sup>大勇 (mahādhidhire) <sup>24</sup>爲美譽 (yaśovate)。<sup>25</sup>動 (cale) <sup>26</sup>無動 (acale) <sup>27</sup>以正動 (samacale) <sup>28</sup>近道因 (dr̥dhasandhi) <sup>29</sup>能善

(susthire) <sup>30</sup>與(譽)遊(asaṃgavihāre) <sup>31</sup>無罣礙(asaṃganirhāre) <sup>32</sup>入諸法門(nirhārayukte)。<sup>33</sup>強而(sthire) <sup>34</sup>有勢(sthā mavati) <sup>35</sup>光大(mahāprabhe) <sup>36</sup>照遠(vipulaprabhe) <sup>37</sup>解等意(samantamukhe) <sup>38</sup>無不入(sarvatānugate) <sup>39</sup>不斷(anācchedye) <sup>40</sup>持實(dhāraṇinidhāne)。(大正vol.19, 680c5-11)

- IV 阿禰(奴子反一) <sup>2</sup>阿企(遣祇反二) <sup>3</sup>摩企(三) <sup>4</sup>三曼跢(都我反) 目企(四) <sup>5</sup>育帝(都參反五) <sup>6</sup>尼陸帝(六) 尼陸底(都矢反七) <sup>7</sup>斯鞞(蒲詣反八) <sup>8</sup>嚧(許耆反) 隸(九) 劫臂(脯迷反十) 劫波伺(十一) 娑隸(十二) 娑羅跋帝(十三) 嚧羅嚧利(十四) 嚧隸嚧犁隸(十五) 嚧羅嚧隸(十六) 遮(主何反) 帝(十七) 遮槃禰(十八) <sup>9</sup>遮羅遮羅禰(十九) 遏恒帝(二十) <sup>11</sup>阿蘭禰(二十一) <sup>12</sup>涅未題(徒隸反二十二) 涅跋多禰(二十三) <sup>13</sup>呢闍(殊何反) 帝(二十四) <sup>14</sup>禰呵[隸](二十五) <sup>15</sup>毘摩隸(二十六) <sup>16</sup>輸檀禰(二十七) 跋羅(盧可反) 訖帝(都至反) 提般禰(二十八) <sup>18</sup>娑嚧(蒲餓反) 毘娑跋禰(二十九) <sup>19</sup>阿僧祇(三十) 陀迷(莫計反三十一) <sup>20</sup>毘富羅斯鞞(蒲詣反三十二) <sup>21</sup>三迦釐沙禰(三十三) 提隸-<sup>22</sup>提[提]隸(三十四) <sup>23</sup>摩呵提提隸(三十五) <sup>24</sup>耶耆跋帝(三十六) <sup>25</sup>遮隸(三十七) <sup>26</sup>阿遮隸(三十八) 摩陀隸(三十九) <sup>27</sup>三(蘇暫反) 摩遮隸(四十) <sup>28</sup>致駄珊地(四十一) <sup>29</sup>頡軻(免質反) 帝(四十二) <sup>30</sup>阿僧伽毘呵隸(四十三) <sup>31</sup>阿僧伽尼呵隸(四十四) 毘呵邏毘摩隸(四十五) 膩呵邏輸檀膩(四十六) 致芩-蘇寐(四十七) 嚧彌(四十八) <sup>34</sup>嚧摩娑帝(四十九) <sup>35</sup>摩呵斯鞞(五十) 三曼跢斯鞞(五十一) 毘富羅斯鞞(五十二) <sup>36</sup>毘富羅刺(盧轄反) 彌(五十三) <sup>37</sup>三曼多目企(五十四) <sup>38</sup>薩婆跢嚧(女留反) 竭帝(五十五) <sup>39</sup>阿那跢(殊支反) 跋(五十六) <sup>40</sup>陀羅尼陀羅尼(五十七) 尼陀那勃低 莎波訶(五十八)。(大正vol.19, 688c19-689a9)

第一期の最初に位置するI訳と、最後のIV訳を比較してみると、I訳では40句ある陀羅尼句のすべてが漢訳されているが、IV訳になるとすべて漢字音写され、26句にもものぼる網掛け部分の増句が確認できる。このように比較してみると、I訳の陀羅尼40句すべてではないが、第一期最後のIV訳まで、初期の陀羅尼句がみごとに継承されているのがわかる。その反面、類本が後代になると、新たな句を増加させていくといった、陀羅尼そのものの増広過程が見えてくる。ここで注意すべき点をあげるならば、IV訳最後の句において、「莎波訶(svāhā)」なる句が付加されている点であろう。このsvāhā句は、後代の初期密教經典になるとよく見られる、真言陀羅尼の最後に添えられる句である。この句が本陀羅尼に付加されたということは、この第一期最後にあたるIV訳原典が成立する時点において、陀羅尼の呪文化が始まっ

たことが明らかとなる。

次に、第二期類本のうち、Ⅶ訳の陀羅尼句を見てみたい。

〈第二期〉

Ⅶ 阿孃-莫孃(一) <sup>2</sup>阿企-<sup>3</sup>莫企(二) <sup>4</sup>娑蔓多慕企(三) 薩知耶囉米-蘇米(四)  
<sup>5</sup>喻吉帝(五) <sup>6</sup>尼嚧吉帝(六) 尼盧吉帝-<sup>7</sup>百羅陞(七) <sup>8</sup>伊隸-迷隸-醯隸(八)  
 脚落弊(九) 脚落波弟(十) 脚落波細(十一) 娑隸(十二) 娑囉-活帝(十三)  
 醯洛-醯隸(十四) 醯隸-醯隸隸(十五) 醯羅-醯隸(十六) 眞地-之活帝(十七)  
 遮隸-遮羅孃(十八) <sup>9</sup>遮囉遮囉孃(十九) <sup>10</sup>阿遮隸(二十) 安帝-安多帝(二十一)  
 迦囉孃-<sup>11</sup>阿囉孃(二十二) 阿臚帝(二十三) <sup>12</sup>涅利莫地(二十四) 涅利槃利多泥  
 (二十五) 涅模利脚帝(二十六) 膩轍利-<sup>14</sup>涅訶隸(二十七) 尼呵囉-<sup>15</sup>毘摩隸(二  
 十八) <sup>16</sup>輪檀泥(二十九) 輪槃泥(三十) 尸洛輪但泥(三十一) <sup>17</sup>波囉脚利帝(三  
 十二) 槃利孃(三十三) 波囉脚利底題波泥(三十四) <sup>18</sup>娑婆毘婆槃泥(三十五)  
<sup>19</sup>阿僧祇-阿米(三十六) <sup>20</sup>毘脯羅百陞(三十七) <sup>21</sup>僧脚利史孃(三十八) 地嚧-<sup>22</sup>地  
 地嚧(三十九) <sup>23</sup>摩訶地地嚧-題波泥(四十) 娑槃泥-摩訶槃泥(四十一) 迦梨吒  
 泥-摩訶迦梨吒泥(四十二) <sup>24</sup>耶舍簿帝(四十三) <sup>25</sup>遮隸-<sup>26</sup>阿遮隸(四十四) 莫遮  
 隸(四十五) <sup>27</sup>娑蔓遮隸(四十六) <sup>28</sup>陀利拏臚地(四十七) <sup>29</sup>蘇私鬚帝(四十八)  
<sup>31</sup>阿僧伽尼訶隸(四十九) 尼訶囉毘摩隸(五十) 尼訶囉輪檀泥(五十一) 陀利茶  
 薩地(五十二) 蘇米-蘇磨槃帝(五十三) 私湯米(五十四) <sup>34</sup>私湯磨槃帝(五十五)  
 私多婆槃帝(五十六) 陀利茶私湯米(五十七) 私湯莫波囉鉢帝(五十八) <sup>35</sup>摩訶  
 百囉陞(五十九) 娑蔓多百囉陞(六十) <sup>36</sup>毘布羅鶴囉睽寐(六十一) <sup>37</sup>娑蔓多慕  
 企(六十二) <sup>38</sup>薩拔多囉奴伽帝(六十三) <sup>39</sup>阿那車耶遲(六十四) 百羅坻娑泥(六  
 十五) <sup>40</sup>陀囉膩爾陀泥(六十六) 陀囉膩慕佉奴散地(六十七) 佛陀(六十八)-題  
 熙皞帝(六十九) 膩陀那(七十)-瞿多利(七十一) 蘇婆呵(七十二)。(大正vol.19,  
 699b16-c13)

このように、第二期最後のⅦ訳に記される陀羅尼句を見ると、網掛け部分のとおり、Ⅳ訳よりもさらに著しい増句が行われ、急激に増広していったことが浮かび上がってくる。と同時に、最後の「蘇婆呵(svāhā)」句が継承されていることも見逃せない。

次に、第三期の類本のうち、その最初に位置するⅧ訳の陀羅尼句を見てみたい。

〈第三期〉

Ⅷ <sup>1</sup>寫陀(提耶反) 體-曇(一) 阿拏-麼拏(二) <sup>2</sup>阿谿-<sup>3</sup>麼谿(三) <sup>4</sup>娑蔓多目谿(四)  
 娑低(低耶反) 邏咩(五) 掃咩(六) <sup>5</sup>欲訖低(二合七) <sup>6</sup>泥嚧訖低(二合八) 泥

嚕訖多(二合) -<sup>7</sup>鉢鞞(九) <sup>8</sup>翳嚩-咩嚩-醯黎(十) 舸立筭(二合十一) 舸立謗(二合) 泥(十二) 舸立跋(二合) 拈(十三) 娑嚩(去) -娑黎(去) -囉唎低(十四) 醯囉-醯黎(十五) 醯禮黎(十六) 醯邏-醯禮黎(十七) 戰提(十八) 遮唎低(十九) 者黎遮囉拏(二十) <sup>9</sup>遮囉遮囉拏(二十一) <sup>10</sup>阿者嚩(二十二) 按低(二十三) 按多低(二十四) 舸囉拏(二十五) <sup>11</sup>阿囉拏(二十六) 阿散低(二十七) <sup>12</sup>涅槃泥(二十八) 涅槃哆泥(二十九) 涅槃訖低(二合三十) <sup>13</sup>涅槃低(三十一) 涅槃(提耶反) 嚩(三十二) <sup>14</sup>涅槃嚩(三十三) 涅槃嚩-<sup>15</sup>伏摩黎(三十四) 涅槃囉-<sup>16</sup>燒馱泥(三十五) 燒跋泥(三十六) 尸羅燒馱泥(三十七) <sup>17</sup>鉢吉低(二合) -鉢泥(三十八) 鉢吉低(二合) -泥跋泥(三十九) <sup>18</sup>娑(去) 唎伏娑唎泥(四十) <sup>19</sup>阿僧倪(四十一) 娜咩(四十二) 綖(娑可反) 咩(四十三) <sup>20</sup>微喃羅鉢鞞(四十四) <sup>21</sup>桑葛履拏(四十五) 姪嚩(四十六) <sup>22</sup>姪姪嚩(四十七) <sup>23</sup>摩訶姪姪嚩(四十八) 泥般泥(四十九) 娑(去) 唎伏娑(去) 唎泥(五十) 娑唎泥(五十一) 摩訶娑唎泥(五十二) 訖吒泥(五十三) 摩訶訖吒泥(五十四) <sup>24</sup>耶睺唎低(五十五) <sup>25</sup>者黎(五十六) <sup>26</sup>阿者黎(五十七) 摩者黎(五十八) <sup>27</sup>娑摩者黎(五十九) <sup>28</sup>姪茶散泥(六十) <sup>29</sup>速思體(二合) 低(六十一) <sup>30</sup>阿僧伽鞞嚩嚩(六十二) <sup>31</sup>阿僧伽泥嚩嚩(六十三) 娑蔓多目谿(六十四) 涅槃嚩(六十五) <sup>32</sup>涅槃嚩欲訖低(二合六十六) 涅槃嚩伏摩黎(六十七) 涅槃嚩燒馱泥(六十八) 姪茶散泥(六十九) 速思體(二合) 低(七十) 掃咩-宋摩唎低(七十一) 思蕩(二合) 唎(七十二) <sup>34</sup>思湯(二合) 摩唎低(七十三) 思貪(二合) 娑唎低(七十四) 姪茶思儻(二合) 咩(七十五) 思湯(二合) 摩鉢卑低(七十六) <sup>35</sup>摩訶鉢鞞(七十七) 娑蔓多鉢鞞(七十八) 鞞摩羅鉢鞞(七十九) 鞞摩羅囉濕咩(二合八十) <sup>37</sup>娑蔓多目谿(八十一) <sup>38</sup>薩婆怛囉(二合) 女揭低(八十二) <sup>39</sup>問(烏可反) 那(去) 捨陀(提耶反) -鉢囉(二合) 低娑(去) 泥(八十三) <sup>40</sup>馱囉尼泥馱泥(八十四) 馱囉尼目抗奴散泥(八十五) 薩婆勃陀娑(去) 瑟低(八十六) 薩婆勃馱姪瑟恥(二合) 低(八十七) 泥馱那遨低嚩(二合八十八) 莎訶(八十九)。(大正vol.19, 703b5-c8)

上記のⅧ訳を見ると、先行するⅠ(1~40)・Ⅳ・Ⅶ本における増句のほとんどを継承しており、そこにⅧ訳による新たな増加分を加えて、総数101句(漢訳では89句とするが、実際には101句となる)に展開しているのが知られる。ということは、Ⅷ訳原典の作者は、先行する類本で増加されていた増句分のことを知っており、それを意識的に継承しようとして、本陀羅尼を構成していたといえる。

もう一点、このⅧ訳において看過できない事態は、二句目に見られる「曇(om)」の増句であろう。第一期最後のⅣ訳において、「莎波訶(svāhā)」句が付加されて

より、このsvāhā句はそれ以降の類本にも継承されている。そして、このⅧ訳において、「曇 (om)」と「莎波訶 (svāhā)」の二句が結合されたという事態は、大乘的な陀羅尼の呪文化、すなわち真言陀羅尼化の完成とみることはできないだろうか。換言すれば、この二句が本陀羅尼にそろったということは、この第三期最初のⅧ訳原典成立の時点において、まさに大乘的な陀羅尼から密教の真言陀羅尼へと展開し終わったとみることができる。

こうして、本陀羅尼をめぐる類本を眺めれば、第一期最後のⅣ訳において、svāhā句が付加され、第三期最初のⅧ訳においてom句が付加された事実が確認できたことにより、教法の憶持ないし無分別空を目的とした本経の大乘的な陀羅尼が、密教の真言陀羅尼へと呪文化していった過程が浮彫になったといえる。

### 3 『無量門微密持経』類本に見られる儀軌の密教的展開

陀羅尼句に引き続き、類本の中から、とくに密教化の著しい点を取り上げて、その展開過程を検討してみたい。ここで注目したいのは「§16-(2)八大神(八夜叉)の守護」である。以下より、この内容を初期密教時代の各三期にわたって見ていくことにしたい。その場合、下記の引用文に示した①より⑧が「夜叉名」であり、(1)より(5)までが守護を得るための原形「持行次第」となる。また、(a)より(e)は、増広されて密教化が進展した「密教儀軌次第」を示している。

— §16-(2) —

#### 〈第一期〉

I 是舍利弗菩薩行持者。有八大神在雪山中。共視護之。其名曰 ①勇決神 ②果強神。③饒裕神 ④雄猛神。⑤體行神 ⑥清潔神。⑦難勝神 ⑧多安神。斯神必來。

(1)常當澡浴 (2)淨其被服正色 (3)經行。(4)慈念衆生 (5)思是法要。神面不遠必安定誦。(大正vol. 19, 682a21-25)

II 又舍利弗菩薩行此持者。有八大鬼是雪山之神。共護視之。其名曰 ①勇健神 ②強力神。③自在神 ④雄猛神。⑤知行神 ⑥難勝神。⑦鳩摩羅神 ⑧善臂神。是爲八。

彼欲令諸神來者。(1)當澡浴其身 (2)淨其衣服。正色 (3)經行 (4)慈念衆生。(5)思是法要如其憶念。彼諸神等尋現在前。(大正vol. 19, 684c11-16)

III 佛告舍利弗。若有菩薩持意念學陀隣尼時。有山名醯摩洹。有八鬼神在其中。常共擁護之開人志意。何等八。①一名勇強神。②二名照明十方神。③三名多所饒

益神。④四名龍王大力神。⑤五名至誠行神。⑥六名能調不調神。⑦七名童男神。  
⑧八名快臂神。是爲八神名。

若學是經欲令神來者。(1)淨自洗沐 (2)著新衣服。(3)當經行時 (4)常持慈心。  
(5)向一切劫。乃端心讀陀隣尼。當隨是經堅奉持之。則疾開解得智慧。爾時神  
在前立。(大正vol. 19, 687c18-27)

IV 又告舍利弗。若有行者專心繼念此陀羅尼。有八夜叉住在雪山。晝夜擁護如是行  
者。除諸衰患益其勢力。何者爲八。①一名首羅(宋言勇健)②二名緻栗馱(堅  
固)③三名簸臘復多(衆多)④四名那羅延婆邏(大力士也)⑤五名那隸因馱羅  
(人主)⑥六名突陀利沙(五能誹謗)⑦七名迦羅邏(喙柴)⑧八名修婆睺(好臂)  
告舍利弗。(a)行者應當以好帛素。圖畫如此八鬼神像。以鮮綵色極令清淨。  
不得雜用衆生之膠。

行者若欲讀誦此經。(1)先應沐浴 (2)著淨衣服。(b)專心祈請此八鬼神。(c)  
爲設種種香潔飲食。衆妙雜香散華華鬘。及淨油燈以供養之。(d)行者復應綵畫  
於地。如圓輪座(e)自在其上。右膝著地手執香爐。(4)一心慈念無量衆生。(5)  
七遍微誦陀羅尼呪。是八鬼神即現其身。(大正vol. 19, 691b21-c5)

最初に I 支謙訳の内容を概観してみると、仏陀釈尊は、雪山中に住する八大神  
(八夜叉)がこの「持」を行ずる菩薩を見て守護すると説く。その八大神とは、①  
勇決神(Śūra)、②果強神(Dr̥ḍha)、③饒裕神(Prabhu)、④雄猛神(Nārāya-  
nabala)、⑤體行神(Cāritramati)、⑥清潔神(Karāla)、⑦難勝神(Durdharṣa)、  
⑧多安神(Subāhu)であるとし、それらの八大神が「持」を行ずる菩薩のもとに  
必ず来ると説く。そして、以下のような持行次第を説く。

- |                          |              |
|--------------------------|--------------|
| (1) 澡浴する。                | (2) 浄衣を着る。   |
| (3) 経行する。                | (3) 衆生を慈念する。 |
| (5) この法要(陀羅尼句・八字義)を思惟する。 |              |

この持行次第を修習した結果、八大神が菩薩の近くに来て守護するので、必ず誦  
行が安定すると説く。

このような I 訳に説かれる八夜叉の名称(①～⑧)や、守護を得るために修習さ  
れる持行次第((1)～(5))の構成は、次の II 仏陀跋陀羅訳や III 求那跋陀羅訳におい  
ても、ほぼ踏襲されている。ただ、II・III 両訳では、八夜叉に到来して欲しいと思  
う者が、この持行次第を修習するように構成されているのが知られる(II「彼欲令  
諸神來者」、III「若學是經欲令神來者」)。

次に着目したいのが IV 功德直訳である。八夜叉の名称(①～⑧)については、先

行類本と同一であるが、持行次第（(1)～(5)）に関しては、密教的な儀軌次第（(a)～(e)）が挿入されているのが確認できる。この持行次第と儀軌次第の流れを整理してみると、以下のような表となる。この表を参照しながら、IV訳における密教的な展開について、次に検討を加えてみたい。

持行次第と儀軌次第の構成

	I	II	III	IV	備考
				(a) 行者應當以好帛素。圖畫如此八鬼神像。以鮮綵色極令清淨。不得雜用衆生之膠	画像の作製
(1)	常當洗浴	當洗浴其身	淨自洗沐	(1) 先應沐浴	沐浴
(2)	淨其被服正色	淨其衣服正色	著新衣服	(2) 著淨衣服	着衣
(3)	經行	經行	當經行時	(3)	經行
				(b) 專心祈請此八鬼神 (c) 爲設種種香潔飲食。衆妙雜香散華華鬘。及淨油燈以供養之 (d) 行者復應綵畫於地。如圓輪座 (e) 自在其上。右膝著地手執香爐	祈願 供養 作壇 作礼
(4)	慈念衆生	慈念衆生	常持慈心	(4) 一心慈念無量衆生	慈念
(5)	思是法要	思是法要如其憶念	向一切劫。乃端心讀陀隣尼。當隨是經堅奉持之。	(5) 七遍微誦陀羅尼呪	陀羅尼念誦

上掲した表のうち、IV訳では、持行次第（(1)～(5)）に入る前に、まず(a)白い絹布（帛素）に八夜叉の神像を彩色するよう指示されている。これは、まさに画像として、八夜叉を描き作画することを指示したものに違いないであろう。これによって、IV功德直訳（訳出年代A.D. 462）の原典がインドに増広成立する時代、おそらく五世紀初頭のころと思われるが、インドの地において、このような画像を描く動向があったと知られる。たとえ、この画像の記述が、訳者・功德直による付加と仮定しても、こうした具体的な指示を付加できる背景には、画像に関するそれなりの予備知識が必要であったはずである。功德直が訳出する時代に画像作画の動向があったからこそ、その知識に基づいて付加し得たと思われるのである。この訳者による付加の点からしても、おそくとも、功德直が訳出する五世紀中葉には、画像を作画して陀羅尼を唱える実践方法が、功德直の周辺で確立していたものと考えられる。

IV訳の行次第は、この後、正規の持行次第—(1)沐浴、(2)着衣—へと進むが、次に行うべき(3)経行が欠落している。そのかわり、昼夜にわたって行者を擁護し、

つらい心配事を除き、勢力を増大させるために(晝夜擁護如是行者。除諸衰患益其勢力)、画像の八夜叉に対して、(b)祈願、(c)供養、(d)作壇、(e)作礼の密教儀軌が行われる。このうち、(b)祈願は、いま述べた行者の守護と勢力増大を祈るものであるし、(c)供養は、祈願成就のために画像の八夜叉に対して、香・飲食・散華・華鬘・灯明などを供える作法である。問題は、(d)作壇である。本文には、「行者、復た應に地に於て綵畫し、圓輪の座の如くすべし」とあるので、ここで画像と同じものを地面に画くことになる。本文に「如圓輪座」と記されている点に着目すれば、この地面に画かれるものは、もはや画像ではなくして、八夜叉を画いた円輪、すなわち土壇のマンドラ (maṇḍala) であったと推測される。さらに、次の作法である(e)作礼を見ると、作画した円輪の地面に右膝を付いて作礼が行われるので、この場合のマンドラは礼拝用のマンドラと位置づけることができる。それも、後代の初期密教になって顕著となる灌頂を行うようなマンドラではなく、行者がマンドラの中に位置して礼拝するためのマンドラであったと思われる。このように画像とマンドラの両方が作られるのは、本経に限ったことではない。五世紀半ばころには成立していたと推測できる『牟梨曼陀羅呪經』では、仏陀の左右に金剛手と宝金剛が配される三尊形式の画像とともにマンドラが作られる。そのうち、画像の最下部には、行者自身が描かれるよう指示される(詳細は大塚(2004a))。また、『不空絹索神変真言經』にも、画像とマンドラの両方が作られる(詳細は大塚(2004b))。このように、画像とマンドラの両方が作られるのは、本経だけではないことがわかるし、五世紀中葉の密教經典に見られる時代的な特徴であったのかもしれない。ともかく、上記の(d)作壇において、八夜叉が描かれるのであるから、これを「八夜叉マンドラ」と呼ぶことができ、マンドラの一原初形態とみなすことができる。この見解が可能ならば、上述したような原初的なマンドラは、画像の模倣より展開したことになる。そして時代的には、五世紀初頭もしくは中葉のころに、画像の作画と平行してマンドラの作壇が行われたことになる。

次に、IV訳の行次第は、正規の持行次第—(4)慈念、(5)陀羅尼念誦—に移る。(4)慈念は、大乘の菩薩にとって欠くべからざるものである。(5)陀羅尼念誦については、I・II・III訳では陀羅尼を憶念するよう指示されているが、IV本の場合「七遍微誦陀羅尼呪」とあって、陀羅尼が「陀羅尼呪」と呼ばれ呪文化され、七遍念誦するよう具体的に指示されている。この点についても、後代に展開する真言陀羅尼の唱え方と類似する作法に変化しているのに気づくことができる。

以上、§16—(2)「八大神の守護」に見られる持行次第をめぐる、そこに密教

的な要素が付加されて、密教化していく展開過程を見てきた。それも第一期の最後にあたる五世紀初頭より中葉にかけて成立、もしくは訳出されたIV功德直訳におけるものであった。要点を整理すると、

第一点は、画像が作画されるようになる。

第二点は、平行して原初的な土壇マングラも作壇されるようになる。

第三点は、陀羅尼が呪文化され、具体的な遍数を限定して念誦されるようになる。

こういった三点が、IV訳に見られた密教化の展開であったわけであるが、実は、第二期以降の類本には、まったくこのような密教化の展開は見られないのである。以下に煩瑣ではあるが、全体像を知るために、他の類本も列挙してみたい。

— §16-(2) —

### 〈第二期〉

V 舍利弗若菩薩受持此陀羅尼。有八夜叉住在雪山。日夜守護爲增壽命。云何爲八。①勇猛夜叉。②堅固夜叉。③自在夜叉。④那羅延力夜叉。⑤法用夜叉。⑥不可繫夜叉。⑦曲齒夜叉。⑧善肩夜叉。舍利弗是八夜叉。常守護彼受持陀羅尼人。

(1)若淨洗浴 (2)著新染衣。(3)常習經行。(4)於諸衆生不生害心。(5)常自思惟此總持法。彼諸夜叉速來守護。(大正vol. 19, 698a3-10)

VI 佛語舍利弗。若有菩薩持意念學陀隣尼時。有山名醯摩槃。有八鬼神止其中常共擁護之開人志意。何等八。①一名勇強鬼神。②二名照明十方鬼神。③三名多所饒益鬼神。④四名龍王大力鬼神。⑤五名至誠行鬼神。⑥六名能調不調鬼神。⑦七名童男鬼神。⑧八名快臂鬼神。是爲八神名。

若學是經欲令神來者。(1)淨自洗沐 (2)著新衣服。(3)當經行時 (4)常持慈意。(4)向諸一切却乃端心。讀陀隣尼當從是經堅奉持之。則疾開解得智慧也。爾時鬼神即在前立。(大正vol. 19, 694c20-29)

VII 復次舍利弗。若菩薩於此入無邊陀羅尼。精勤用意者。於彼雪山之中有八夜叉。日夜常來衛護此人。以其威力遍入彼人身諸毛孔。何等爲八。其名曰 ①勇健夜叉 ②堅固夜叉。③衆多力夜叉 ④那羅延力夜叉。⑤實行夜叉 ⑥無能降伏夜叉。⑦長牙鋒出夜叉 ⑧善臂夜叉。

如是等舍利弗。是諸菩薩若欲令彼八大夜叉來現身相者。(1)當淨洗浴 (2)著好淨衣 (3)入經行道場。(4)於一切衆生邊不起惡心。(5)於此法本陀羅尼一心憶念者。彼八夜叉速現面門前。令是菩薩分明得見。(大正vol. 19, 702a25-b6)

## 〈第三期〉

VIII 佛告舍利弗。若菩薩專心念此陀羅尼者。有八藥叉常當擁護。何等爲八。①一名戍嚩。②二名姪荼。③三名鉢部毘。④四名那羅延跋。⑤五名遮唎怛。⑥六名突達産。⑦七名俱末。⑧八名蘇博呼。此八藥叉住在雪山。護念是人資助道業。爲除衰患益其精氣。

持是經者 (1)應當沐浴 (2)著淨衣服。(3)經行誦習此陀羅尼。(4)於諸衆生其心平等。(5)觀察經義如法供養。(大正vol. 19, 707b4-11)

IX 復次舍利弗於此出生無邊門陀羅尼。加行菩薩摩訶薩。有八大藥叉住雪山中。皆來增加修行者身。威力晝夜加持擁護。何者爲八。所謂 ①初名戍囉藥叉(唐言勇猛) ②次名涅哩(二合)荼藥叉(唐言堅固) ③三名鉢囉(二合)部藥叉(唐言主宰) ④四名那羅延末羅(二合)藥叉(唐言那羅延力) ⑤五名左哩怛囉(二合)末底藥叉(唐言行慧) ⑥六名訥達沙藥叉(唐言難摧) ⑦七名迦拏囉藥叉(唐言哇喋) ⑧八名蘇磨呼藥叉(唐言妙臂)

彼等悉皆來時修行者 (1)應當澡浴 (2)著新淨衣。(3)應習經行不惜身命。(4)應起大慈心普遍一切衆生。(5)應當誦念此陀羅尼。彼八大藥叉速疾示其行者。(大正vol. 19, 679a6-17)

X③その時、世尊は舍利弗長老に仰せになられた。「舍利弗よ、この「無辺門によって成就される陀羅尼」に精進する菩薩摩訶薩の身体に、雪[山]に住する八夜叉が[威力と]氣力を入れて、晝夜に見張り、守り、包み込むのである。八[夜叉]とはいかなる者かといえば、すなわち、①勇猛(Śūra)という夜叉、②堅牢(Dr̥dha)、③主宰(Prabhu)、④那羅延力(Nārāyanabala)、⑤行慧(Caritramati)、⑥不能壞(Durdharṣa)、⑦鳩摩羅(Kumāra)、⑧妙臂(Subāhu)という夜叉である。

彼ら八夜叉〈王〉が到来するために、(1)[陀羅尼受持者は]よく沐浴し、(2)浄衣を着て、(3)經行処に行き、(4)一切衆生に偏見や悪意のない心を発し、(5)この陀羅尼の法門をまた作意すべきである。そのように〈作意〉したならば、その[陀羅尼作意者]に、彼ら八夜叉が速やかに顔を見せるであろう。(D. No.914, 253b6-254a3)

このように、第二期類本においても、第三期類本においても、先の第一期IV訳に見られたような密教化の三点は確認できない。これは一体どうしたことであろうか。この結果に基づけば、文献学的には、IV本の訳者である功德直が、独自に密教的な要素を付加しただけと結論づけるのであろうが、問題はこれで終結しないのである。

注釈家Jñānagarbha (A.D.700~760のころ活躍) のXIV『広註』を見ると<sup>(6)</sup>、八字義を随念する儀軌の説明があるなかで、夢のお告げと称して、以下の内容を説くことに問題の根幹が潜んでいる。

- 1) マンダラの作壇儀軌と灌頂儀軌を解説する点。
- 2) 陀羅尼句読誦と八字義を随念する儀軌として、上述したIV訳の増広部分—(b)祈願、(c)供養、(d)作壇、(e)作礼—と同様の密教儀軌を解説する点。

この二点について、以下より詳しく検討してみたい。まず、1) マンダラの作壇儀軌と灌頂儀軌の解説部分からである。

#### 《XIV『広註』所説の儀軌》

##### —八字義即八菩薩の三昧の義—

あるいはまた、

[v.101] これら八種字は、八菩薩善巧者たちの三昧として説かれたものである、と牟尼が説いたのである。

[v.102] その[字] 義を修習する者には、彼ら[八菩薩の] すべてが現前して住し、[修習者が] 陀羅尼を得られるようにするために、あらゆる努力をなすのである。

これら八種字は、毘盧遮那など、以下[の本文] に出てくる八菩薩たちの三昧であるところの、それら所説の三昧であると、次第の如く世尊が仰せになられたのである。それらの種字の三昧の義を修習することより、彼ら[八] 菩薩のすべてが現前するのである。

次に、[彼ら八菩薩が] 現前すると、その修習者に陀羅尼を得られるようにするために、努力するのである。[これについては] 次のように、以下[の本文] 中に「彼ら八大菩薩たちは、その[修習者] が陀羅尼を得られるようにするため、努力するであろう。」と出ている。それゆえ、これらの八字義が説かれたのである。[八より] 少なくとも説かれず、不必要であるゆえに、[八より] 余分にも説かれなかったのである。

##### —マンダラの作壇儀軌—

[v.103] 諸菩薩と諸仏と諸夜叉たちとを、次第の如く配するこのマンダラは、夢の中で説示されたものである。

[v.104] 白蓮華王にして、意に適った八葉の花弁[を描き]、その中央に等しきものなき牟尼が瓶をともなっているのを配置すべし。

[v.105] 八葉の花弁には、牟尼の子である毘盧遮那などの八[菩薩] す

べてが、瓶と各々の種字を有しているのを配置すべし。

[v.106] 諸の花弁の間には、八夜叉を配置すべし。[これが作壇の] 一儀軌である。別の「灌頂」儀軌もまた同様に、五色粉を以て四角形を描くべし。

—灌頂儀軌—

[v.107] 知者(=阿闍梨)は、その「四角形の」中央に、牟尼が八葉の白蓮華の中に、水を満たした瓶をともなっているのを配置すべし。同様に、彼ら牟尼の子「である八菩薩」もまた「配置すべし」。

[v.108] 「すなわち」蓮華座を有し、水瓶をともなって、四方に二菩薩ずつ配すべし。すべての方角に菩薩の間には、彼ら「八」夜叉を配すべし。

[v.109] 弟子にして、清浄で功德を有し、陀羅尼を修習して瑜伽を成就したいと望む者を白座に座らせ、彼ら「牟尼と八菩薩の」瓶を以て灌頂すべし。

[v.110] このように夢に説示された儀軌を私が明らかに説いたのは、私自身がよく憶念すべきためであって、増上慢は少しもないのである。

このように広く諸の八種字の自性が摂せられたのである。[Inagaki (1987, pp. 214-216)]

XIV『広註』では、まず初めに、本經所説の八字義は八菩薩の三昧であるとして、牟尼たる釈尊を八葉花弁の中央に配し、花弁には八菩薩、その花弁の間には八夜叉を配したマンダラの作壇儀軌が説かれる。次に、このマンダラとは別に、四角形の同様のマンダラがもう一つ作壇されて、陀羅尼の成就を望む弟子を灌頂する儀軌が説かれる。この灌頂の際に作壇されるマンダラは、いわゆる灌頂壇の役割をもつものといえる。それゆえ、この二種のマンダラのうち、最初のマンダラは諸尊の「集会マンダラ」であり、もう一つの灌頂の際のマンダラは、諸尊の集会する面前で、諸尊のもつ瓶から灌頂を与えるための「灌頂壇」であったといえる。こうしてみると、註釈家Jñānagarbhaの夢のお告げと称した二種のマンダラは、先に述べたIV功德直訳に示された八夜叉の画像と土壇マンダラに対応するように思えるのである。おそらく、長い年月が経過するうちに、功德直が八夜叉の画像としたものが諸尊の「集会マンダラ」へと展開し、地面に描かれた土壇マンダラが「灌頂壇」へと展開していったものと推測される。

次に、XIV『広註』所説の2) 陀羅尼句読誦と八字義を随念する儀軌の解説について見てみたい。

《XIV『広註』所説の儀軌》

〔v.127〕〔陀羅尼を〕得たいと望む者は、毎日〔陀羅尼を〕読誦し、随念すべし。陀羅尼として知られるものは、言葉の余剰なものなのである。それは、次のように知るべきなのである。陀羅尼とは、少しの福德ではきわめて得難いのである、と。

それゆえ、常に恭敬して、長い間絶えず修習する福德の資糧を有する者が、陀羅尼を得るであろう。「〔一ヶ〕月を半分に分けて」という言葉が何であってもそれは、世尊が特別に修したゆえに説かれたのである。このように〔一ヶ〕月を半分に分けて、恭敬して修する時、注意深く沐浴などを前〔の半月〕に行い、十分に〔陀羅尼の〕読誦などを修すべしと説かれたのである。それは、その通りであると知られるべきために説いたことは、

〔v.128ab〕〔世尊が〕特別に密意されたゆえに、「努力精進する」の言葉がまた〔本文中に〕説かれたのである。

なぜ、「努力精進すべし」と説かれたそのわけは、特別に密意したことを表すためである。「努力精進」の言葉は、恭敬を始めとする修行そのものと結びつけられるのである。なぜそうかといえ、

〔v.128cd〕それゆえに、「沐浴」などを前〔の半月〕に行い、「〔陀羅尼の〕読誦」などそれらのことをなすべし、と。

沐浴し、斎戒し、決定住し、マンダラ〔を造り〕、華・香・焼香・飲食・供物・灯明を供え、菩提のために誓願を立て、罪を懺悔することなどを前〔の半月〕に行い、〔その後の半月に、陀羅尼の〕読誦などをなすのである。読誦することに疲れたならば、〔八字義の〕随念を修するのである。その〔随念〕に疲れたならば、再び〔陀羅尼の〕読誦をなすのである。このようにして、昼夜をその〔行者〕は乗り越えるべし。〔Inagaki (1987, pp.227-228)〕

上掲した儀軌の解説を整理してみると、一ヶ月のうち前半月に①沐浴、②斎戒、③決定住、④マンダラの作壇、⑤香華飲食などの供養、⑥誓願、⑦懺悔が修習される。これが前行といえるものである。次いで、後半月では、本行として陀羅尼成就のために、⑧陀羅尼句の読誦と八字義の随念が繰り返し修される旨が解説されている。

問題は、これら前半月における前行から、後半月の本行へと移る全体的な流れな

のである。これらのうち、すべての項目ではないが、上述したIV功德直訳に見られた増広部分と重なる次第が見受けられるのである。たとえば、比較対照した以下の表を見てみると、①沐浴・⑤供養・④作壇・⑥誓願・⑧陀羅尼読誦の項目において一致しているのがわかる。さらに⑤供養においては、IV功德直訳とXIV『広註』とが、内容的に同一の供物を供養するよう指示されている点で一致している。このようにIV功德直訳の時代、およそ五世紀初頭あるいは中葉より、Jñānagarbhaが活躍した時代の八世紀中葉ごろまで、ほぼ三世紀も隔てているにもかかわらず、行体系においてほぼ一致するのは注目に値する。

## 『広註』所説の儀軌構成

	前半月の前行								後半月の本行
IV功德直訳	(a)画像の作画	(1)沐浴	(2)着衣	(b)祈願	(c)供養	(d)作壇	(e)作礼	(4)慈念	(5)陀羅尼念誦
XIV『広註』		①沐浴		②齋戒、③決定住?	⑤供養	④作壇	⑦懺悔?	⑥誓願	⑧陀羅尼読誦と八字義の隨念

次に、不空訳として、XV『仏説出生無辺門陀羅尼儀軌』一卷(No.1010)なる関連儀軌が存在するので、以下にその全文をあげて検討を加えてみたい。

## 《XV不空訳『仏説出生無辺門陀羅尼儀軌』》

## 眞言如經

修行此出生	無邊門總持	轉目三種業	依三祕密門
所謂三金剛	身印語眞言	心住三摩地	由入三平等
善住瑜伽故	自身同本尊	在凡成正覺	斯法最深祕
大日經王説	一生補處等	尚非其境界	況餘劣慧人
如獲輪王珠	祕持不妄説	是尊即羯摩	波羅蜜菩薩
由住出生故	示少年女形	顯明大慈母	諸佛住是智
能普現色身	處大菩提心	跏趺蓮臺上	大印威儀等
同不空成就	如來之相狀	定羽金剛拳	當心持蓮華
置般若梵夾	慧羽説法相	揚掌申五輪	忍峰現羯磨
十字金剛輪	首冠五如來	遍身草綠色	復於身支分
安布八字門			
𑖀跋字住於心	𑖀擺字成毫相	𑖀嚩字置舌端	𑖀惹字置於頭
碧色成頂相	𑖀迦字置慧掌	綠色成羯摩	十二緣行輪

㊦ 馱黄置定掌	成華般若夾	㊦ 奢字安觀足	㊦ 乞叉置止足
五字皆皓素	如雪乳鵝月	是字成輪相	三摩耶密印
加持頂印是	初後次第法	同諸部儀軌	八十俱胝佛
圍遶是尊住	復有八菩薩	安住於八方	及以八藥叉
四攝八供養	次第而布列	成祕曼荼羅	誦持眞言經
所成如本教	修行諸儀則 (大正vol.19, 679c8-680a15)		

不空訳の儀軌を見ると、前半部分では、三密瑜伽行を基本とする儀軌の本尊・羯磨波羅蜜菩薩の尊容が説明される。後半部分では、本尊の肢分に八字が布置され、本尊の周囲に八菩薩と八夜叉、さらには四摂・八供養の菩薩が配される道場観(マンドラの観想による作壇法)が明かされる。これを三密瑜伽行の本尊として、引用文の文末に説示されるように、儀軌が修せられるのであろうが、この内容をみると、本尊が羯磨波羅蜜菩薩とされ、周囲に四摂・八供養菩薩までが配されることになってしまうと、この儀軌は、不空によって『金剛頂経』系の儀軌に再編されてしまったように思える。ここまで、密教化が進んでしまうと、『無量門微密持経』本来の形から随分と逸脱した感がする。しかし、八字・八菩薩・八夜叉は継承されており、IV功德直訳の画像や土壇マンドラの体裁が残されているので、これを本経の最終的な密教化と見ることができよう。

いままで見てきたように、IV功德直訳に付加された密教的要素と後代の密教者所説の儀軌との間に、多くの類似点が見いだされた。三世紀以上の時間的隔たりがあったとしても、たがいの類似点が見られるというのは単なる偶然ではなく、IV訳の増広部分である密教儀軌が、後代の密教者にも確かに伝承されていたことを物語っている。たとえば、密教化の進む時代に属する第三期類本のどこにも、密教的儀軌が説かれず、画像やマンドラすら見られないにしても、秘かに本経を伝持する密教者の間に、上述したようなマンドラや儀軌が継承されて、後代まで伝承されていたと解釈することができる。それゆえ、IV訳に見られた密教的特徴は、IV訳のみに限った付加ではなかったと判断できる。

以上、三期にわたって密教的な展開を見てきたが、唯一、第一期の類本最後にあたるIV訳において、密教的な展開が認められたわけである。その展開が促された時代は、およそ五世紀初頭より中葉にかけてのころに違いないであろう。その後の類本になると、まったく同様の密教的な展開を見出すことはなかったが、たとえ文献には現れずとも、秘かに本経を伝持する密教者の間に、この密教的な展開部分が伝承されていたと考える。

## まとめ

『無量門微密持經』の構成内容は、最初に菩薩のもつべき能力や功德が示され、次に、この菩薩の能力や功德を実現するための「持要句」と、目指すべき境界の「無量門微密持」が提示されて、最後に、実践上の用心と具体的な行次第が明かされる、という三段で構成されていたといえる。その中でも、終始一貫する本經のテーマは、支謙訳の特徴でもある「持」という語によって示される陀羅尼であった。この陀羅尼に関しては、本經の場合、二種の意味が含意されていた。第一は、§ 9の念持する「持要句(陀羅尼句)」そのものを指す場合である。第二は、口に唱える陀羅尼句のようなものではなく、大乘の菩薩が得道を旨とし、「持要句」の語句や字義に導かれて体得する無所得空三昧の境地、いわゆる「無量門微密持」を指す場合であった。それゆえ、持要句ならびにそれを字義化した八字義は、あくまでも無所得空なる無量門微密持にいたるための導入手段であったといえる。

そこで、持要句ならぬ陀羅尼句を類本の中にみると、初訳であるI支謙訳から、類本が後代になるにつれて、次第に増広されていく特徴が見られた。そのうち、第一期最後のIV訳において、svāhā句が付加されて呪文化が始まる。やがて、第三期最初のVIII訳になると、さらにom句が付加されて完全に呪文化されていく特徴が見いだされた。このことによって、時代的には第一期の最後にあたる五世紀中葉ころより、第三期の始まる六世紀中葉にかけてのほぼ百年の間に、大乘的な陀羅尼が密教の真言陀羅尼へと呪文化していった過程が見えてきたわけである。

また、直前で問題にした陀羅尼句を読誦したり、陀羅尼句を字義化した八字義を随念する修行方法も変化する特徴が確認できた。この点については、「§ 16-(2)八大神の守護」を取り上げて検討を加えた。その結果、唯一、第一期の類本最後にあたるIV訳に限って、八夜叉の画像を描き、その前で供養したり、マンドラが作壇されたりする密教的な展開が認められた。その展開が促された時代は、第一期最後の時代にあたる五世紀初頭より中葉にかけてのころに措定した。しかし、その後の類本には、まったく同様の密教的な展開を見出すことはなかったが、たとえ文献には現れずとも、秘かに本經を伝持する者たち、たとえば先に見たJñānagarbhaや不空のような人物の間に、この密教的な部分が伝承されていたのが確認された。それゆえ、表面的には後代の類本に現れない密教的な展開部分は、IV功德直訳の単発的な特徴ではなく、後代まで密教者の底流で伝承されていったものであると結論づけたのである。

以上の二点に焦点をしばって、本経の類本に見られた密教への展開過程の特徴を眺めてみると、そこにはある時代を境目に、大乘から密教へと傾斜していく動向が認められる。とくに陀羅尼句が呪文化する動向が見られるのは、第一期最後にあたる五世紀中葉のころより、第三期の始まる六世紀中葉にかけての時代であった。一方、この陀羅尼句に基づく行体系が密教化するのは、第一期最後の時代である五世紀初頭より中葉にかけての時代であった。この二点の時代を比較してみると、陀羅尼の呪文化と行体系の密教化という二つの動向が、ほぼ五世紀中葉のころで重なっているのに気づくことができる。この五世紀中葉の時代こそ、大乘から密教へと傾斜していく転換時代であったのではないだろうか。いま、この時代を密教化の一転換点として押さえておきたい。

そこで、次なる問題提起として、他の密教経典を精査して、本経と比較検討して見る必要が生じてくるわけである。その場合、時代的にも本経と同じように初期密教の各三期にわたって展開する類本がある『孔雀明王経』を、比較対照のテキストに選択するのが最も適切と思われる。両経における類本の展開過程を比較することにより、ある程度の密教化の動向を垣間見ることができるものと思われる。

#### 【参考文献】

- ・ Inagaki (1987) : *The Anantamukhanirhāra-dhāraṇī Sūtra and Jñānagarbha's Commentary, A Study and the Tibetan Text*, Kyoto, 1987.
- ・ 氏家 (1979) : 氏家昭夫「多聞の熏習としてのダーラニー説」(『高野山大学論叢』第14巻、1979、pp.1-24)
- ・ 大塚 (2004a) : 大塚伸夫「『牟梨曼陀羅呪経』における初期密教の特徴」(『高野山大学密教文化研究所紀要』第17号、2004、pp.(23) - (52))
- ・ 大塚 (2004b) : 大塚伸夫「Amoghapāśakalparājaにおける出世間儀軌の構造について」(仏教文化学会十周年北條賢三博士古稀記念論文集『インド学諸思想とその周延』山喜房仏書林、2004、pp.(133)-(153))
- ・ 大塚 (2005) : 大塚伸夫「インド最初期密教の経典について」(遠藤祐純先生・吉田宏哲先生古稀記念『慈悲と智慧の世界』、智山学報第54輯、2005、pp.(61)-(75))
- ・ 堀内 (1965) : 堀内寛仁「出生無辺門陀羅尼経について」(『密教学密教史論文集』高野山大学編、1965、pp.301-322)
- ・ 堀内 (1966①～⑥) : 堀内寛仁「西藏訳「出生無辺門陀羅尼経」及び「広釈」・和訳(一)～(六)」(①『密教文化』第76号、1966、pp.14-43)、(②『密教文化』第79号、1967、pp.59-83)、(③『密教文化』第80号、1967、pp.59-79)、(④『密教文化』第81号、1967、pp.49-78)、(⑤『密教文化』第83号、1968、pp.52-79)、(⑥『密教文化』第84号、1968、pp.49-76)
- ・ 『梵語仏典』: 塚本・松長・磯田編著『梵語仏典の研究IV・密教経典篇』(平楽寺書店、1989、pp.

71-73)

註

- (1) 堀内 (1966①~⑥)、Inagaki (1987, pp.109-292) を参照。
- (2) 『道行般若經』卷第二功德品第三 (大正vol.8, 431a23-432a5)
- (3) 『般舟三昧經』卷中、擁護品第八 (大正vol.13, 912c2—913a23)
- (4) 『大会經』Mahāsamaya-suttanta (Dīgha-nikāya, vol.II, No.20, pp.253-262 = 南伝vol.7, pp.271-296) ; 『長阿含經』(大正vol.1,79b1-82a1)
- (5) 『阿吒曩胝經』Āṭṭānāṭṭiya-suttanta (Dīgha-nikāya, vol.III, No.32, pp.194-206 = 南伝vol.8, pp.259-284)
- (6) Inagaki (1987, pp.214-228)、堀内 (1966④、pp.65-76) 参照。

<キーワード> 初期密教、陀羅尼、呪文、曼荼羅、画像